

途上国の子どもたちのために、 私たちにできることは何ですか？

ワールド・ビジョンには、小・中・高校生の皆さんから多くの質問が寄せられます。その中でも一番多い質問が「途上国の子どもたちのために、私たちにできることは何ですか？」というものです。皆さんなら、どんな答えを思い浮かべますか？多くの方は「募金」と答えたのではないのでしょうか。「私たちにできること」は「募金」だけではありません。工夫次第で、様々なことができます。今回は、小学生・中学生による取り組みをご紹介します。

支援の輪を広げていく！

一 捜真小学校の場合

神奈川県横浜市にある私立捜真小学校では、一人一人がお金を出し合って、チャイルド・スポンサーシップに参加しています。1年生はバングラデシュのロニ君、2年生はインドネシアのマレイアンリ君、3年生はフィリピンのロビマー君、4年生はインドのバンディ君、5年生はタイのスジャレーちゃん、6年生はカンボジアのチェス君への支援を通じて、途上国の子どもたちの生活や地域開発の様子を学んでいます。小学生が一人のできる募金は限られていますが、全員が協力すれば大きな支援に結びつきます。

4月2日、捜真小学校3年生30人は、横浜で行われた「子どもたちを助けよう！1000人のチャイルド・スポンサー大募集」のイベントに参加し、支援への協力を呼びかけました。支援チャイルドの生活を紙芝居で紹介すると同時に、歌を通じて支援の必要性をアピールしました。また、チャイルドと自分との違いなど、支援を通じて感じたことをまとめた作文を発表しました。30人の息のそらったアピールは、きっと多くの人々の心に響いたことでしょう。

このように、日本の人々に途上国の子どもたちの現状を伝え、支援の輪に加わっていただけるようアピールをすることも、私たちにできる国際協力の一つの形です。



イベントで紙芝居を披露

学んだことを知らせていく！

一 岩手県・盛岡市立松園中学校の場合

松園中学校の2年生5名は、修学旅行の際にワールド・ビジョンの事務所を訪問し、HIV/AIDS(エイズ)、人身売買について学びました。問題の重要性に気づいた松園中学校の皆さんは、自分たちが学んだことを他の人にも「伝えたい、分かってほしい、考えてほしい、受けとめてもらいたい」という気持ちから、学年全体の発表会で報告することにしました。報告を聞いたある生徒は、「涙が出そうだった」と感想を述べたそうです。このように、「自分たちが学んだことを、途上国の状況をよく知らない人々に伝えていくこと」も、途上国の子どもたちへの支援に必要な重要な働きです。

しかし、松園中学校の皆さんは、今回の発表に決して満足していません。発表したことで、自分たちにはまだ学ばなければならないことが多くあることに気づき、また、途上国の子どもたちについて、もっと深く知りたいという向上心が芽生えたからです。途上国の子どもたちのことを伝えるためには、まず何よりも、伝える側の正しい現状を知ろうとする努力が必要です。松園中学校の皆さんは、今後もこの問題に取り組んでいくことでしよう。

途上国の子どもたちのために「私たちにできること」は、まだまだたくさんあります。それぞれの立場で何ができるか、皆さんもぜひ一度考えてみてください。